

一年間の研究の経過

大橋正夫

昨年の本欄でも述べたとおり、対人関係の心理学の体系を樹立することが私の研究の主題である。研究は大きくわけて二つの方向から進めているが、そのおのおのにおける過去1年間の経過の概要を以下に記すことにする。

1. 対人関係の心理学的構造 そもそも対人関係とは何か、それはいかなる心理学的構造をもつものなのか。この問題についての私の考え方のウアトラインは、一昨々年の本欄（紀要17巻）において述べた。その後の理論的追求の進展は遅々としているが、最近「対人関係の理解」について小稿を依頼された機会に、現時点における構想をのべておいた。^(註1)

つぎに、この問題についての実証的研究に関しては、一昨々年度より本年度にかけて資料を収集したので、近く公表する予定である。^(註2)

今後は、認知理論（ことにバランス理論）と強化理論が対人関係の心理学において果たす役割の関係について考究していきたい。なお本年度大学院の授業で、テキストに B.Syrne の *„The attraction paradigm“* (1971) を選び、学生諸君との討議によって得たところが援用で

きるものと思っている。

2. 印象形成過程 昨年度より、私のほか、社会心理学専攻の5氏の参加を得て、「印象形成グループ」を結成した。最初の成果は紀要18巻に発表したが、本年度（19巻）は2編の論文にまとめることができた。一方は昨年度の延長として、言語情報による印象の統合過程を扱ったものであり、他方は顔写真による印象形成を問題にしている。さいわい、昭和47年度文部省科学研究補助金（一般C）の交付を受けたので、研究を促進することができた。今後も継続していく予定である。

このほか、温田芳久教授を代表者とする集団課題解決に関するチームにも参加した。ただここではまだ成果を語る段階にいたっていない。

(1972年11月30日)

注1) 三隅二不二ほか編「人間関係の心理学」（経営行動の心理学、第6巻、ダイヤモンド社、1973年1月刊）

注2) 「集団に対する魅力に関する一研究」、「対人関係についての分析的研究」（いずれも予定題）

1972年度の研究活度活動の概要

丸井文男

1971年5月に新築された臨床棟によって、研究、臨床実践の場が充実し、研究グループのスタッフも増加しているが、治療事例の **Supervision** の時間が、必ずしも充分にとれにくい点が問題点の一つである。

以下、グループの活動、個人の研究活動の概要を述べる。

1. 自閉傾向児の親に関する研究 今回の紀要に一部論文を掲載したが、従来から継続している、治療過程の分析をとうしての新しい診断、カテゴリーの作成、及びその類型化の研究の一環として、親の治療をとうしての母親の意識の変容、患児への認知の変容を把えようとするものである。

内容的には、今回の紀要論文は、予報的なものである。

2. 自閉症の言語発達に関する類型化の研究 これも今回、論文として、本紀要に掲載したものであるが、言語発達と自閉症候群との関係は、論争点の一つである。従って言語発達のもつ自閉症の成因論及び、治療的予後との関係は、重要な課題であるので今後更に追跡さ

れるものである。

なお、自閉症に関する言語発達と治療教育的研究に関する本年度から新たに、3年間厚生省の心身障害児特別研究費が交付されることになり、今回の研究もその一つである。

3. 大学生の適応異常に関する研究 過去6年間に亘る京大、九州大、広島大、金大などとの共同研究が継続され、本学では、一昨年来の追跡的研究をつみ重ねており、本年秋の全国大学保健管理研究集會に、学生相談室の土川隆史助手と共同研究として発表した。

4. 一昨年来の反社会的事件を惹起した一青年の精神病理学的考究の研究は、本年6月までに一応完了し、その後、本人も、社会的に復帰し、極めて健全な状態にある。

この事例の **mechanism** について、自己催眠現象としての稀有な内容をもつものであるが、いづれ、何らかの機会に公表したいと思っている。

5. その他のやや社会的な意味をもつ側面に触れれば本年秋から愛知県の教育振興事業調査研究会議の委員と

して、愛知県における教育相談関係事業の将来計画を立案中である。学校教育における児童・生徒をめぐる諸問題は、丁度、産業公害がここ2、3年来顕著な様相を呈してきたと同様な形で、もはやどうにもならない状態に近く、児童、生徒に「精神公害」を与えていると考えられるので、この面での積極的な方策は極めて緊急な課題であろう。

なお又、これに関連して、愛知県の児童・生徒の精神

健康研究協議会が発足し、その議長として、具体的な実践研究や、その施策を検討中である。

これらのことは **outside** の仕事であるが、教育—社会というものとは絶えず、われわれの本質的な課題の一つであると思われるので、この分野からの新しい研究領域の拡大は多々存在すると思っている。

(1972年11月30日)

課題および現況

水野 欽 司

1. ここ数年来の課題であるデータの自動分類（クラスター分析）の研究については、今年度も引続き、理論およびアルゴリズムの考究、計算プログラムの作成と試算を行なっている。

その一部は、「相関比基準による系統クラスター化」（名大教育学部紀要—教育心理学科—18巻）、「項目分析に関する一試案」（東海心理学会21回大会）にて報告した。しかし、これらはごく限られた問題の検討である。

データの自動分類はただ単に分類のためのものだけでなく、問題意識に即したものでなければならず、また他の解析モデルとの一体化が計られていなければならない。その意味で、いろいろな既存の解析方法を内に包みこむ形の総合的な分析モデルとして扱う方向で努力している。

なお、これに関連して、名大大型計算機センターのライブラリ拡充のための昭和47年度開発プログラム公募に応じ、「ノンメトリック多次元尺度構成」、「クラスター分析」の2課題について協力している。これらの方法に興味をもつ人々と共同で来年度まで継続する予定である。

2. 調査技術の研究に関連しては、NHK放送世論調査所の47年度研究プロジェクト「調査不能の分析」に統数研の林知己夫氏と共に参加し、最近における調査不能

サンプルの漸増傾向の実態分析とその対策について方法的検討を進めている。また（財）計量計画研究所の将来交通量推計モデルに関する二・三の研究に協力研究者として、住民調査および分析を実施中である。

3. 早いもので当教室に着任以来3年になる。当初から電算機指向的な側面を強く見せて来たためか、近頃ではすっかり、「計算屋」のイメージを内外に与えてしまったようである。「計算屋」であることを誇りにしている自分だから、それはそれでよいのであるが、それ故にまた残念なことも多い。

行動科学分野における広い意味のデータ処理には電算機が有効であることはいうまでもない。それについては解説、「電子計算機の応用—人文・社会系におけるデータ解析—」（名大大型計算機センターニュース、11号）で触れた。しかし、最近では、自分で計算できないどころか分析方法の内容理解もせずにコンピュータに頼る人間が全国的に増加したことも事実である。「コンピュータ公害」ともいえるこのような風潮の助長に自分も一役買っていることを反省している。

47年9月急逝された故統教授は生前、現象に対する細かい配慮、考察なしに、数量主義に走る若い研究者に多い傾向をいつも戒めておられた。それよりも悪いといえるこの「公害追放」にも今後は積極的に取組むつもりである。

(1972年11月30日)

内 田 良 男

昨年度は下記事項について報告した。

1. 統計数理について
2. 教育統計について
3. 県民性の研究

4. 交通問題に関する研究

その後の概況についてはつぎの通りである。

1. 特に著しい成果はなくなお継続する。
2. 名古屋市教員異動実態調査はその集計を終り、現